

Title	少女中国 20世紀中国語圏文学における女学生表象( Abstract_要旨)
Author(s)	濱田, 麻矢
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2018-07-23
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/doctor.r13198">https://doi.org/10.14989/doctor.r13198</a>
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（文学）	氏名	濱田 麻矢
論文題目	少女中国——20世紀中国語圏小説の少女表象		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論は、20世紀の中国語圏で書かれた小説を「少女叙事」というキーワードを使って読み解いたものである。</p> <p>中国の近代が青年の発見によって始まったことはよく知られている。清末、梁啓超は論説「少年中国説」を著して少年に奮起を促し、少年の活躍に中国という国家の若返りを託して、自らを「少年中国の中国少年」と称した。また民国初期に発刊された雑誌『新青年』はその名の通り中国の青年たちを鼓舞するプラットフォームとして新文化運動の根拠地となり、1919年の五四運動を導いた。「中国少年」といい、「新青年」といい、若者たちは儒教道德の束縛によって衰退した老中国が、若々しい国家として蘇るための核として考えられていた。</p> <p>本論は、この「少年中国の中国少年」とは、ニュートラルなようでいて実はジェンダー化された概念だったのではないかと、という考察から始まる。確かに、少年たちは封建的な家父長制の軛を離れて新たな天地を目指すように励まされた。では、少女たちはどうだったのだろうか。新女性も『新青年』の熱心な読者でありえたが、彼女たちの実践は男性のそれとは異なるものにならざるを得なかったのではないかと。彼女たちは、「青年」の良き伴侶になる以上のことを求められていたのだろうか。ここで、より強く正しい社会を作ろうと奮闘する若き国家＝「少年中国」に対して、彼らによって見出され、ある時は欲望され、またある時には嫌悪される少女たちのバーチャル空間として「少女中国」が想定される。少年たちがみずみずしい知性と行動力による国家建設を期待されていたのに対し、少女たちはある時には良妻賢母として少年たちに尽くすことを求められ、またある時は少年たちと同じく政治信念のために献身することを期待されていた。このダブルスタンダードは、近代に輸入された「自由恋愛」に由来するものと思われる。</p> <p>前近代の中国では、女性のライフコースは固定されており、一定の年齢が来れば家長によって定められた婚家へ嫁ぐことになっていた。生家から婚家へ、生涯ただ一度（であるとされていた）移動に、本人である女性の意思が問われることはなく、彼女は生まれては父に、嫁いでは夫に、老いては子に従順に従うことだけを求められていたのである。</p> <p>ところが「少年中国」の出現と女子教育の開始は、少女たちにも人生の選択を求めるようになった。こうして、継ぎ目なくつなぎ合わされ、本人の意図とは無関係に進められていた生家から婚家への移動に、断絶が生まれる。女子教育が始まったことで、少女たちの多くは生家を離れ、同性同士の濃密な生活空間を作り上げ、そこで自</p>			

分の人生を選ぶことを期待されるようになったのだ。本論が主に検討するのは、生家を出た後の少女たちの冒険物語である。自由恋愛／自由結婚を実践するのかしないのか、結婚した後に「妻」「母」以外の自己表現が許されるのか、自分で選んだ結婚が破綻したときにどのように自己責任を引き受けるのか、そもそも恋愛／結婚しないという選択肢はありうるのか——少女たちの前には、少年たちとは異なる問題が立ちはだかっていた。

近代中国で出現した女学生は、前近代であれば嫁いでいるはずの年齢に至って、出産可能な成熟した身体をもちながら、なお結婚及び出産の義務を免れて自由を謳歌している存在であった。そしてまた、その自由とは時限つきであり、彼女たちは遅かれ早かれ家庭に囲い込まれて子を産み、良妻賢母になることを期待されていた。中国の「少年」たちにとって、（自由）結婚はより大きな事業達成のための里程標に過ぎなかったが、少女たちの多くにとっては恋愛／結婚生活の維持そのものが畢生の事業とならざるを得なかったのである。そして少女の奮闘は、多くの少年たちにとって取るに足りない小さな問題でしかなかったために共有されず、学園を出た後の（元）少女たちは各家庭の中に切り離されて孤独になっていった。そして卒業してもなお同性同士の楽園にとどまり続けようとする女たちには、異性愛中心主義の規範的な立場から容赦ないミソジニーが向けられていくことになる。

こうしたテーマについて、本論はテキストを精読しながら一つ一つ検証した。以下、各章の内容を略述する。

序章「少女中国」では、少年中国／中国少年に対する少女中国／中国少女という概念を提起し、巴金『家』と魯迅「傷逝」を例にとって、青年たちの「事業」と少女たちの「事業」が非対称であることを論証し、不可視化されてきたこの非対称性から「少女中国」の女学生叙事をテーマとして論じることの意味について述べる。

第1章「女学校空間の登場」は、ジェンダー化された「青年」と対をなす概念である「女学生」叙事について、最初の近代的口語体小説である陳衡哲「一日」と、五四作家の一人凌叔華の「小劉」とをとりあげ、女学校という空間が中国語圏文学にもたらした意味を問う。「一日」は近代最初の口語体小説であったという側面のみが強調されがちだが、最初期の留学生陳衡哲が、「女子が共同で学習する空間」に初めて米国で出会った時の新鮮な感情を、米国の少女小説『あしながおじさん』に触発されて口語で綴ったのではないかという仮説を提起した。また、「小劉」を通して女子教育によって生まれた「女同士の友情」の濃密さと残酷さ、そして卒業すれば乾いた砂のようにバラバラになってしまう儚さについて論じた。

第2章「内助の功という自己実現——表現主体としての許広平」は、文豪魯迅の妻であった許広平に焦点をあて、「自由恋愛」の実践と卒業後の女学生について考えたものである。「ノラは家出してからどうなったか」で女子が経済力を持つことの重要性を力説した魯迅ですら、自分の事業のために妻許広平が外で働くことを良しとしなか

った。自由恋愛という「事業」が成功した後、新女性がなお飛翔し続けることがいかに難しかったかを問うものである。

第3章「とけない謎——沈從文『蕭蕭』における女学生表象」では、男性作家が書いた新女性（女学生）に目を向ける。沈從文が故郷湘西を舞台とした中編「蕭蕭」は、童養媳（幼女のうちに買い取ってきた嫁）であるヒロイン蕭蕭が夫ではない出稼ぎ工と関係を持ち、望まぬ妊娠をする物語だ。村を時折よぎってゆく女学生は、蕭蕭と直接言葉をかわすこともないのだが、蕭蕭はなぜか彼女たちに強く惹かれてゆく。村人たちの好奇と嘲笑の的になっていた都会の女学生は、蕭蕭に、そして作者沈從文にとってどのような意味を持っていたのか。作者が敢えて設けたと思われる叙述の空白から、作家沈從文の中にあった女学生コンプレックスを突き止めようと試みた。

第4章「青い服の少女——張恨水、張愛玲における女学生イメージ」は、1930年代に大きな人気を誇った通俗小説家張恨水の作品と、40年代の上海で一世を風靡した張愛玲の作品から「清楚で聡明な理想の少女」がどのように眼差され、欲望されているのかを読み解こうとする。ドイツから輸入された染料、インダンスレンで青く染めた服は、民国期の女学生のシンボルでもあった。女子教育によって生まれた「理想の少女」はまた、その「理想」に当てはまらない多くの少女たちを疎外し、孤独に追い込むイメージでもあったのである。

第5章「植民地台湾の女学生——楊千鶴の日本語創作をめぐって——」では台湾に目を向ける。1940年代、日本語で創作していた作家、楊千鶴の小説「花咲く季節」は、女学校卒業前後に波のように押し寄せる縁談に揺れる女学生の心情を細やかに描いた短編である。植民地エリートとして、楊千鶴は日本語で世界文学を受容し、日本人より巧みに日本語が書ける文才を自負していた。と同時に、彼女のエッセイには「伝統的な台湾の娘の例外にはなりたくない」という叫びがこだましている。少女と人妻、宗主国と植民地という二つの狭間を彷徨う台湾新女性の心情をテキストに沿って読み解いた。

第6章「愛か思想か——解放軍入城と女学生」は、1957年に発表された宗璞「紅豆」と、2005年に英語で発表されたイーユン・リー「市場の愛」を取り上げた。前者は1948年、人民共和國建国前夜の大学を舞台とし、ブルジョワの恋人と米国に亡命するのか、北京にとどまって祖国建設に献身するのかを選ぶ女子大生の葛藤を描いた。後者は1989年の六四天安門事件を後景とし、北京の大学生だったヒロインが、民主活動に積極的に参加したために未来を閉ざされてしまった友人と自分の恋人とを偽装結婚させ、米国に出国させた物語である。ほとぼりが冷めたところで自分も渡米する計画だったのだが、二人はヒロインを裏切り、彼女は故郷の田舎町で孤独に中国教師を続けている。

人民解放軍のそれぞれの入城前後の北京のキャンパスを舞台にし、「愛を拒んで米国へ行かなかったヒロインの回顧を描く」という共通点から、愛情における自己決定

と政治の関係について考察した。

第7章「女学生だったわたし——張愛玲「同学少年都不賤」における回想の叙事——」は、張愛玲という稀有な恋愛小説作家が、30年代の女学生時代をどのように記述したのかについて論じる。上海での女学校で、少女たちは抑圧的な家庭を離れ、束の間の自由な時間を謳歌していた。彼女たちの性の目覚めと互いの肉体への関心、同性への恋が回顧されてゆく一方、現実の時間では国共内戦後に渡米したヒロインが孤独に老いてゆく様子も目をそらさずに描かれている。かつて女学生だった新女性たちが、その後どのような性と生を生きたのか、テキストの精読を通じて問うた。

第8章「崩れる塔、萎れる花——張愛玲後期作品における愛のかたち——」も続けて張愛玲を論じた。前章では同性間の愛情を対象としたが、第8章では張愛玲がデビュー以来一貫して書き綴ってきた自由恋愛のパラドックスについて、作家自身がたどり着いた答えを追おうとする。ここでいうパラドックスとは、恋愛が完全に自由意志に基づくものであるとしたら、相手に恋愛感情の維持を強制できないという命題である。本章では張愛玲自身の恋愛体験が文学として昇華されるまでを追った。

第9章「白頭の宮女古都を説く——大きな歴史と小さな記憶——」では、90年代の京都と台北を舞台とした朱天心『古都』を論じる。7章と同じく女学校時代の友人が時を隔てて再会を約束するというストーリーだが、この小説では二人は結局出会えないままだ。双生児を描いた川端康成『古都』を意識したストーリーは二人称で語られており、主人公「あなた」と会えなかった友人Aは、川端が描いた双子のように互いが「そうになっていたかもしれない自分」であったと思われる。本章では、女学生の個人的な記憶と政治と社会の歴史が絡み合うダイナミズムについて検討する。

第10章「遥かなユートピア——王安憶『弟兄們』におけるレズビアン連続体——」は、本論で唯一文化大革命後の中国を扱う。姉妹ではなく「兄弟」として、ホモソーシャルな絆を擬態しようとした女子学生たちの大学卒業前後を描いた王安憶の中編を題材に、卒業後にもなお学生時代の絆を維持しようとする女性二人が異性愛婚の規範からの逸脱を試みて挫折したという物語の持つ意味を、「レズビアン連続体」という概念を用いて解明した。

終章「愛という名のもとに——20世紀中国文学の少女像」は、以上の論を踏まえ、近代「少女中国」における最大の冒険が、生家を出た後、少女たちが次の居場所（多くの場合は婚家であった）に軟着陸を試みるまでの過程であったと論じる。その冒険とは、前近代までは継ぎ目なく繋がっていたライフコースに懸隔が空いたことによって可能になったのだった。この章では「懸隔」を生んだのは他ならぬ女子教育であったと主張した上で、近代以降に誕生した女子校空間によって彼女たちが何を獲得し、何に束縛されたのかを論じ、その「冒険」の核にあったものがロマンチックラブであったこと、ロマンチックラブとは少女たちを飛翔させると同時に束縛するものでもあったことを結論づける。

本論の独自性として、次の二点をあげられる。

一つ目は、理論もしくは歴史の蓄積を枠組みとして当初から借りることなく、前提なしでテキストや作家に向かい合ったラテラルな姿勢である。本論は「少女中国」を形作る少女叙事を文学テキスト中心に取り上げたものであり、女性文学史の流れを追う（作る）ことを目的とはしていない。近代に東アジアに輸入された自由恋愛が、「少女中国」において最大の事業であったことを踏まえ、あくまで各論で文学に現れた少女表象を論じることを目標とした。自由恋愛の定義としては社会学者ギデنزが提起したロマンチックラブ・イデオロギーを用いる。ロマンチックラブとは「（異性）愛、性、結婚」の三位一体からなるものを「真の愛」とし、それがモノガマスな形で継続することを絶対化する観念形態であった。女性は男性よりもロマンチックな感情を重視しており、「愛に生きる性別である」とされてきた。受け入れるにせよ拒否するにせよ、少女たちがこの思想にどのように対処したのかに本論の関心はある。したがって、本論の論述は国民国家と強い関わりを持つ従来の「少年」中心の叙事分析とは大きく異なるものとなった。「少女中国」に焦点を合わせて近代テキストを読んだ結果、抗日や革命といった「大きな物語」は後景化される。国家の大事の前ではつまらぬ感傷とされてきた「児女情」をクローズアップした、いわば近視眼的な読み方がここでは選ばれている。

二つ目の特徴は、時代や書き手、さらに言語の異なる様々なテキスト同士に対話をさせているところである。女子学生による愛情の自己決定が都市では崇高で革新的なものとなり、農村では奇妙奇天烈な笑話になるという3章の「蕭蕭」論や、政治的動乱の前に愛情の選択をせまられる物語として1949年と1989年のテキストを取り上げた6章などがそれにあたる。少女叙事に焦点を合わせることによって、場合によっては小説テキスト本来のテーマを捨象し、細部をクローズアップすることになった。それはジェンダー化された少年／青年物語の中に無意識に描かれている少女／少年の非対称性に目を留め、すくい上げる作業にもなった。

ロマンチックラブとは、従来思われてきたほどに単純な問題ではない。生家から飛び出した中国語圏の少女たちが、自分たちの未来にどのような自己決定を下してゆくのか、恋愛はそこにどのような影響を及ぼしたのか。少女中国における中国少女の冒険譚は驚くほどに豊かであることを、本論は示している。

(論文審査の結果の要旨)

前近代中国の著作の大部分は、男性の書き手が男性の世界を描くものであった。18世紀中期の『紅樓夢』など稀少な例を除き、少女たちの内面に触れた文学作品を男性が書くことは、ほとんどみられなかった。数的に限られた女性識字層は、あくまでも家庭の中に身を置きながら、詩・詞・弾詞など韻文体のジャンルでだけ書くのが一般的であった。19世紀末から20世紀初期、中国の改革者たちの間に、従来の固陋な伝統を打破し「少年中国」として近代国民国家を形成しようとする思潮が流行する。この「少年中国」の主導者は、男性の青少年に限られていた。一方、中国近代化をめざし都市部に設置された女学校は、少女たちを家庭外へと連れ出し、ここに女学生という階層が生まれる。彼女たちは、男性とは異なる問題に家庭外で直面し、ここに新たな「少女中国」の構築に向けた物語を小説としてつむぎ始める。

論者は、「女学生」表象こそが、近現代中国語圏文学における「少女」叙事の出現・変容を知るための鍵となるという関心を持ちつづけ、主要な作品についてひとつずつ研究成果を発表し、その達成は学界において高い評価を得てきた。本論は、過去の論者の成果にもとづきつつ全体を一貫した構想のもとで書き改めただけでなく、新たに加えた序章・終章において「少女中国」概念に関わる論者の構想の枠組みを明確に提示することにも成功している。

序章は、「少女中国」の概念提示、近代中国に西洋近代からもちこまれたロマンチックラブ観念、地域・国民国家と切り離しがたい「中国文学」に代わる語として「さまざまな地域、いろいろな言語」をゆるやかに括る「中国語圏文学」（王徳威らが提唱）を用いるといった事項をとりあげて、論者の立脚点を明確にした部分である。つづく第1章から第10章は、1917年の陳衡哲の小説「一日」から、1989年の王安憶「兄弟たち」まで、中国語圏文学の70年にわたる女性作家の作品を主軸とし、あわせて2014年のイーユン・リー『孤独よりも優しく』なども視野に入れつつ、女学校での少女たちの同性間の友情、自由恋愛を達成した彼女たちが配偶者から求められた「内助の功」、女子教育によって強られる「理想の少女」像、学校卒業後の少女たちによる女学生時代の回顧、異性愛婚の規範からの逸脱をめざした女性たちの挫折、といったテーマを、作品をていねいに読み込みながら取り上げている。そのうち最も重点的に扱われているのは、近現代中国語圏文学において魯迅と並ぶ最も重要な小説作家として、中国語/英語で中国/アメリカにおいて作品の発表を続けた張愛玲(1920-1995)であり、その個々の作品に現れた、現在形の女学生表象、回想の女学生表象、モノガミーな愛とポリガミーな愛といった諸相がとりあげられる。また、陳衡哲「一日」とウェブスター「あしながおじさん」の近似、男性作家沈從文の女学生表象が作家自身の農民的視点ゆえに魅力的なものとなりえたこと、1940年代の日本統治下において日本語で創作した台湾人作家楊千鶴の作品に描かれたファッションと台湾ナショナリズムの意識など、随所にあらわれた興味深い指摘も、本論の魅力となっている。

終章は、本論全体の結論部であり、それまでの各章を踏まえた精彩ある論述が展開

される。まず「少女中国」における「冒険」とは、少女たちが生家を出て女学校に入ってから、女子教育を経て、次の居場所（多くは婚家）に至るまでの不安定な過程であったこと、その冒険の核に西洋近代のもたらしたロマンチックラブがあることを確認したのち、ロマンチックラブは女性たちが家族の定めた婚姻によって生家から婚家へと一気に移動していた前近代中国には存在しなかった観念であること、ロマンチックラブ・イデオロギーの伝播によって少女たちは恋愛の自己決定を許されたが、その一方で、愛を選ぶよう追い込まれる物語、良妻である以外の選択肢を奪われる物語が増加し、自由恋愛や結婚の責任は女性が背負うべきものという観念も拡散していったことを指摘する。その後、1940年代以降の毛沢東・中国共産党の文芸政策により、恋愛よりも革命を上位とみなす作品が続々と生産される時期を経て、1970年代における文化大革命の終結以降の中国大陆では再び恋愛の物語への回帰が起きる。しかし、1980年代末期になると王安憶「兄弟たち」のように同性愛へ向かう女性たちを描く物語も影響を拡大し、夫婦と子とを核とした家族の観念を突き崩し始める。

本論は、全体にわたって、日本・中国大陆・台湾・西欧における過去の先行研究をよく把握した上で、論者によって提示された「少女中国」という視点から、達意の文章で明快な論述がなされている。本論によって、中国語圏文学における近代的「少女」をめぐる語りの大きな流れを読者は把握できるだけでなく、愛情と結婚の自己決定が、単純にまとめられるものではなかったことも知ることができる。また、他の言語文化圏、とりわけ近代化にともなって西洋から女子教育を導入せざるを得なかった日本などアジア地域の文学にみられる「少女」との対照研究をおこなう際に、本論は中国語圏を代表する基準系となるはずである。

ただし、論者に今後の継続した検討を期待したい箇所も残されている。たとえば、「民国期小説を中心とした少女叙事を読んで行く上で、物差しの役割になってくれる」と高く評価される鲁迅「傷逝」、丁玲「霞村にいた時」の両作品に関しては、折にふれてその特徴が論じられているものの、もし独立した章で扱ったならば、いっそうその意義が明らかになったであろう。また、近代から強いられた課題を抱えていたのは「少女中国」の少女たちばかりでなく、「少年中国」の少年たちも同様であったはずで、両者の異同について考察した論述を追加することで、少女叙事独自の特質はなにかが、より明確になったと思われる。これらの点について、論者はすでに見通しを持っており、今後の研究においてひとつひとつ解決されていくはずである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成30年5月30日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。